

研究発表大会顛末記

第 30 回国際 P2M 学会秋季研究発表大会結果報告

実行委員長：早稲田大学 環境総合研究センター 上級研究員 岡田久典
実行副委員長：早稲田大学 環境総合研究センター 研究院准教授 永井祐二
開催校事務局：早稲田大学 環境総合研究センター 研究助手 中川 唯

はじめに

国際 P2M 学会では、毎年、春と秋の年 2 回、研究発表大会を開催している。今年度、新型コロナウイルスの感染拡大による影響を鑑みて開催中止となった春季大会に引き続き、秋季大会は早稲田大学を開催校としつつも、学会初のウェブ形式にて開催することとなった。

大会プログラムは、午前と午後の部に分けて開催された。午前の部ではオンデマンド形式で研究発表が行われ、午後の部は Zoom によるライブ配信での基調講演とパネルディスカッションが行われた。当日は、早稲田大学の会場には一般来場者が入らない形であったにも関わらず、リアルタイムで多くの質疑のコメント等が寄せられ、盛況のうちに初めてのオンライン研究発表大会を終えることが出来た。主催者各位、学会関係者、一般参加者の皆様に厚く御礼を申し上げる。

大会の趣旨

本大会のテーマは『危機を乗り越える P2M』であり、今まさにコロナ禍という未曾有の危機の真っ只中にある現代世界にとって、ますます重要性を増している議題と考えられる。他にも、気候変動や激甚化する自然災害、少子

高齢化や格差などの多様な社会・経済問題が、我々の将来を複雑で不確実な、リスクの多いものになっている。

我々が直面している問題の多くには人間行動、制度、組織、システム間の相互作用が指摘されており、単独のプロジェクトで対応していくことは難しいとされる。解決には、個別の専門分野毎の対応ではなく、専門領域を超え英知を結集し、全体最適、全体調和を目指して社会ニーズに応じていく必要があると考えられる。これらは SDGs や Society5.0 等の構想にも通じており、全体像を使命に複合プロジェクトを集約して展開するプログラムマネジメント思考に基づいた新しい「仕組みづくり」、「危機を乗り越えるための」革新的な価値創造が重要となっている。

本大会は、この時代に対応していくための思考や方法論としての P2M を議論する場であり、さらなる知識の深化と展開、体系化を図ったものである。

大会概要

<研究発表>

研究発表はオンデマンド形式で行われ、発表者はパワーポイント（2010 以降）のスライドショー記録機能を用いて発表用動画（mp4 形式、10～20 分）

を事前に作成した。本大会では計 13 件の発表があり、企画・R&D、ICT 系、人材育成、社会系の 4 つに分類された。発表動画は 10 月 17 日～11 月 16 日の期間で公開され、視聴者からの質疑は 10 月 25 日まで受付とされた。発表者による回答は 10 月 27 日までに行うものとされた。初めての経験となったが、各発表に多くの質問が寄せられ充実した研究発表となった。ただ、やはり臨場感は何物にも代えがたいものであり、分野横断的な研究の多い当学会では様々な分野の専門家による「立ち話」が、研究の持続的・飛躍的な発展をもたらすものと再認識した次第である。多くの関係者のご努力のたまもので今回成功を収めることができたが、やはり、早急に平常の大会開催が実施できればと願っている。

＜講演・パネルディスカッション＞

午後の部は、開催校である早稲田大学で 2020 年 10 月 17 日に開催された。会場となったのは、早稲田大学の新たな研究拠点として 2020 年 3 月に竣工した新研究開発棟 121 号館の地下 1 階カンファレンスルームである。カンファレンスルームは約 200 名収容可能であるが、本大会においては、結果的に講演者とパネリストおよび、学会関係者、当日の運営に携わるスタッフが会場に足を運ぶ形となった。

会場では、アルコール消毒および、マスクやフェイスシールドの着用による徹底した感染対策を実施した。また、パネリストの間に飛沫防止用のアクリルボードを設置し、マイクも事前に滅菌処理をした上で使いまわしを避

け、講演者・パネリストごとに専用のものを用意した。

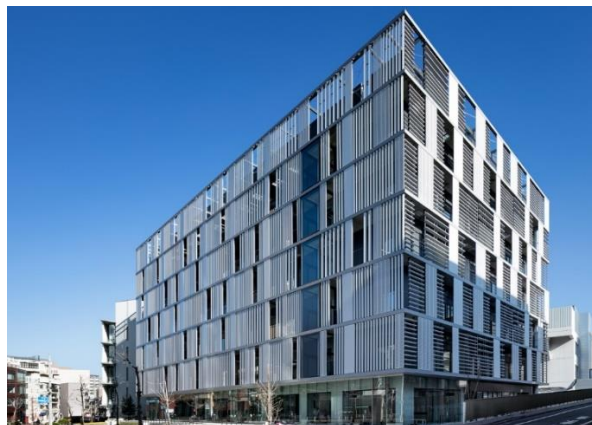


図 1 早稲田大学 121 号館

講演・パネルディスカッションのライブ配信に関しては、専門業者への運營業務の委託は行わず、多くのリモート会議、Web セミナー開催経験を踏まえて早稲田大学チームが必要な機材を準備し、取り組んだ。カメラは 2 台態勢であるが、全体の俯瞰の画と、発言者をフォーカスするカメラ+マイク 8 本で個別に発言者をフォローし、臨場感をもたせた。



図 2 当日の運営体制の様子（感染対策）

Zoom を利用したライブ配信ではあるが、参加者の存在が可視化されない一方向的な『聴講』、いわゆるウェビナー形式は採用せず、通常の会議システ

ムと同様に双方向のやり取りが可能な形で配信を行った。ただし、講演に関する質問やコメントは随時チャットシステムを利用して受け付けた。

当日のアクシデントとしては、利用していた大学のネット回線が瞬断し、プログラムの進行中に配信が一時中断してしまう事態があった。幸い、即座に配信は再開することができ、参加者の側にも大きな混乱は見られなかった。不測の出来事ではあったが、流石に環境の変化に柔軟なマネジメントを論じる P2M 学会ならではの、その場にいた全ての関係者が迅速かつ柔軟な姿勢で対応することのできた結果と思われる。



図 3 当日の会場の様子（会場内のモニターには参加者の画面が映っている）

冒頭、山本会長から頂いた開会のご挨拶では、学会とはどのような状況にあっても『学び』と研究の場を提供するものであり、自然界や社会で起こっている事柄に対して常に冷静に、多様な考えを受け入れることによって、論理的解決策を探していくという、変革が求められる時代だからこそ見失ってはならない学会の使命と本質についてお話があった。

基調講演として、長崎大学熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授でプランインターナショナルジャパン理事長の池上清子氏に『グローバルヘル



図 4 山本会長によるご挨拶

スの考え方」～世界での経験から～』の題目でご講演いただいた。

氏は、国連など国際組織での豊富な経験を踏まえて、病気の感染対策や健康の問題が、自国や植民地における対策から国際的なものとなり、現代に至るまでにグローバル、地球規模へと拡大して捉えられるようになり、SDGsによって『誰も取り残さない（Leave No One Behind）』世界への変革が求められるようになったこと、そして依然として（乳幼児を含む）子供や女性、高齢者や障がい者、難民、社会的に周辺に置かれているグループといった人々が『取り残されやすい』存在である現状について、議題を提起していただいた。



図 5 池上清子氏による基調講演

グローバルヘルスという視点から、世界が現在どのような課題を抱えているのかを丁寧かつ鮮明にご提示いただき、SDGs とは単に掲げられた目標ではなく、価値を共有して創出・実現していくものでなくてはならず、まさしく P2M の方法論を用いての社会システムの強化、ステークホルダー間の連携と強調、個人や組織のエンパワーメントが必要とされていることを明確にしてください。

講演を通じ、今まさに新型コロナウイルスによる危機を経験し、どのように乗り越えていくかという問題に直面している我々にとって、きわめて有用となる知見をいただきました。

引き続き、パネルディスカッションにおいては池上氏と共に下記の方々にご登壇いただきました。

- 白井久美子氏（日本ユニシス(株) 執行役員）
- 吉川成美氏（県立広島大学 MBA 教授）
- 島岡未来子氏（早稲田大学政治経済学術院教授、神奈川県立保健福祉大学教授）

偶然ながらも、パネリストの全員が

女性であり、ここまで女性のパネリストが勢揃いするパネルディスカッションは助産師学会以来であるという、池上氏の言葉に象徴されるよう、今までの P2M 学会にはない雰囲気で行われた。それぞれの分野において「現場」を経験した上で理論の体系化を図られており、そうした豊富な見識に基づく議論を提起していただいた。また、モデレーターは本大会の実行委員長である早稲田大学



図 6 パネルディスカッションの様子

の岡田が務めた。

具体的な内容としては、白井氏からはプログラムマネジメントを企業改革に適用されてきた豊富なご経験などを通じ、Society5.0 や SDGs にふさわしい働き方を目指し、企業が変わっていくには人材・風土からの改革が必要であるという『経営労働政策、パンデミック前後での働き方変革の視点』からご意見をいただきました。

吉川氏からは、『FARM TO TABLE の STEAM 教育：ポストコロナ時代のスマート&コンパクト農業の実現』について論じていただく中で、Society5.0 に向けた人材育成に関して、科学

(SCIENCE)、テクノロジー (TECHNOLOGY)、エンジニアリング (ENGINEERING)、数学 (MATHEMATICS) からなる『STEM』にリベラルアーツの A を足した『STEAM』教育の重要性が指摘された。

島岡氏からは、『危機を乗り越える人材の養成：アントレプレナーシップ教育の事例から』として、早稲田大学における全学的な起業家教育「WASEDA-EDGE 人材育成プログラム」(2014 年度-2016 年度 文部科学省 EDGE プログラム採択) についてご紹介いただき、新型コロナウイルス影響下における対応や課題、P2M 理論による事例の解釈と理論の適用によるプログラム向上について論じていただいた。



図 7 会場の様子

最後に、久保副会長から今回の学会開催が危機的な状況の中で、P2M 理論に基づいて準備され、成功を収めたことが強調された。さらに、次回主管校である慶応大学からも挨拶があり、3 月に開催される次期大会の成功を祈るムードの中で、本大会のシンポジウム部分は無事幕を閉じた。次回大会もコロナ禍の中での対応を迫られるかもしれないが、P2M の精神に則り、今回の経験を活かし、次回はさらに新しいシステムの改善を願いたい。

(2020 年 12 月 14 日 受領)